

大人の教えは、形の影に於ける、声の響に於けるが若し。問あれば
すなわちこれに応じ、其の懐う所を尽くして、天下の配となる。無響に
お 無方に行き、汝の適復の撓撓を挈げて、以て無端に遊
び、無旁に出入して日と与に始めなし。頌論形軀は大同に合し、
大同にして己なし。己なければ悪くんぞ有を有とするを得ん。有
を觀る者は昔の君子、無を觀る者は天地の友なり。

【大体の意味内容】

偉大な人物の教育とは、影が形に添うようなものである。響きが声に伴うようなもの
でもあつて、表にハッキリと顕れないが、奥行きや深みを伴つて支えてくれる。問われ
るとそれに応え、質問したものの思いを察して期待以上の教えを垂れる。こうして人々が
大人の教えを乞うという形で、実質的な天下の支配者たりうるのである。必要なければ何
の響きも立てずにおり、動き出したなら特定の方向に縛られずに遊動する。ぐしやぐしや
に交錯する人の海を仕切ろうとせずとその混沌に遊ぶのだ。それは果てしない世界に於い
て、いつ太陽が昇り始めたか知ることができないのと同様である。(余計な人知を交えずに、
人々のエネルギーをあるがままに發揮させる)。その姿は舞を舞うては大いなるものを寿
ぎ、すべてのものに差別区別のない大同の世界に溶け込んでゆく。小さな個人や自己とい
つた枠を超えて、大同宇宙そのものとなる。自己というものが無くなれば、どうしてちつ
ぽけな存在に執着する必要などがあるうか。存在の価値を見いだそうとするのは、昔の
君子である。無の世界に觀入する者は、天地の友である。

「俺が教えたから〇〇は成績を上げた」「俺のお陰で△△は合格した」といった具合に、「俺が、私が」と自己主張する教師はほんとうに「見苦しい」くらいだらないと思います。集合写真を撮れば自分が生徒たちの一番前の真ん中に居座ろうとする輩^{ういせ}。入学式で学生を迎え入れるのではなく、学生を待たせてあとから取り巻きを従えて偉そうに入場する大学の学長。教師ではなく「コーナーコーチ」の身で、生徒の東大合格を自分の手がらと吹聴する愚か者。唾棄^{たき}すべき「指導者」をたくさん見てきました。もちろん心から尊敬できる立派な人もいますが…

教員養成の大学の学部や、教育現場での研修では、老子や莊子の思想を真っ先に学ぶべきではないか、本気でそう思います。指導者自身は自立しようとするべきではない。影や余韻で十分。力すくで生徒を型にはめたり自分に従わせたりするのはなく、生徒たちのあふれるエネルギーを存分に発揮させてやることで、それを引き出せば、教師の仕事は終わりの。その結果、自分より優れた人間が育ってゆけば、教育は大成功であるわけです。